

# リカバリーサポート・ネットワーク

数多いパチンコ業界の社会貢献活動の中でも特に評価が高いのが、パチンコ・パチスロ依存問題の相談機関「リカバリーサポート・ネットワーク」に対する支援だろう。業界が自らの事業が引き起こすマイナス面から逃げることなく、その解決に取り組んでいるからで、そうした姿勢は精神医療関係者らの間でも高く評価されているようだ。

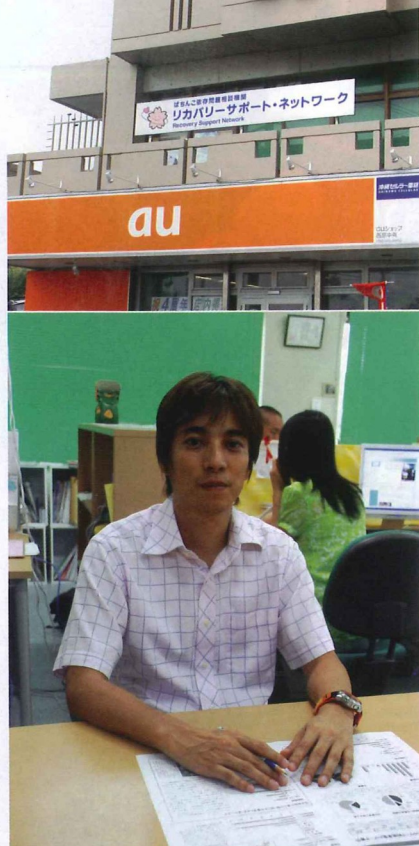
その「リカバリーサポート・ネットワーク」は那覇市中心部から10km足らずの西原町にある。6階建てマンションの2階。1階に入居している携帯電話会社の派手な看板が目立つ。

スタッフは医師の西村直之代表ほか、相談員3人、会計担当スタッフ1

人、アルバイトスタッフ2人、海外の論文などの翻訳担当スタッフ1人。月曜日から金曜日の午前10時から午後4時、ここで1人でも多くの依存症者の問題を解決しようと全国からの相談に応じている。

同ネットワークが相談用に用意している電話回線は3本。かかってくる時は一気にかかってくる人が多い。昼休みなどを利用してかかってくる人が多いからようだ。

相談してきた人を特定するようなどとはしないが、かけてくるのは大半が本人とその家族。家族からの電話は深刻に悩んでいる様子がひしひしと伝わってくる。ところが、本人からの電話は意外に依存の自覚が感じられない



上/下階は携帯電話会社、上階は一般住居  
下/リカバリーサポート・ネットワークの西村代表

Before the Casino in OKINAWA



ものも多いようだ。ただ、どんな電話であっても早期介入は依存からの早期回復につながりうる。相談員は電話を切る際、「電話をかけてきていただきありがとうございます」と必ず感謝の言葉を述べる。相談しようという気持ちを持ったこと自体を肯定することで、さらに回復に向けたアクションを促したいからだ。

パチンコホールのポスターの掲示などは、同ネットワークのポスターの掲示だという。今も多くのホールがトイレなどに張り出しているが、ポスター掲示が減ってくると、相談件数も顕著に減ってくる。ポスターは依存症者に向けて開かれた窓だ。その窓を閉ざし、業界が誇る社会貢献活動を間違っても開店休業状態にしてはならないだろう。

相談票に記入しながら相談の電話を受ける



## 参考文献

- 「平成17年観光要覧」  
沖縄県刊
- 「沖縄のリゾートカジノを考える～国際観光都市を目指して」  
宮城英夫著・ベンチャーソフト事業部刊
- 「沖縄にカジノは必要か？」  
カジノ問題を考える女たちの会刊
- 「しんぶん赤旗」2005年7月13日
- 「沖縄タイムス」2005年8月15日
- 「読売新聞」2006年2月17日
- 「第4回日本カジノ創設サミットin沖縄DVD」  
同実行委員会制作